

# 石山寺密蔵院経蔵聖教目録

歴史研究室

石山寺所蔵の聖教は、薫聖教、校倉聖教、深密藏聖教、知足庵聖教などに大別できる。薫聖教は平安時代中期の淳祐内供執筆の聖教群であり、校倉聖教は江戸時代明暦年間に尊賢僧正によって、当時石山寺に所蔵されていた聖教類のなかから、平安時代以前のものと推定された聖教を取り出して三十合の経箱に収められたものである。深密藏聖教は、大正年間大屋徳城氏が寺内院坊に分蔵されていた聖教類を本坊に一括し、それを深密藏聖教と命名したものである。以上の三聖教群については、目録がすでに作成されている（『石山寺の研究』）。知足庵聖教は上記の聖教群以外の聖教で、現在調査中のものである。ところで、深密藏聖教は現在122箱の経箱に収められている。そして、近時製作の新調箱を除く111箱と、現在空箱である1箱の、併せて112箱の旧箱が現存する。旧箱は江戸時代末から明治時代初年にかけて製作されたものであるが、その多くに各院坊ごとに、その院坊のものであることを示す墨書銘が記されている。その墨書銘によって、深密藏聖教と一括総称される経箱・聖教も、その多くにつき明治時代までは寺内のどの院坊で所蔵されていたかが推定できるのである。墨書銘を院坊により分類すると、密蔵院墨書銘箱45箱、法輪院墨書銘箱は2種有り、第1種は8箱、第2種は20箱、明王院墨書銘箱15箱などである。そしてそれら寺内の院坊のうち、密蔵院については「密蔵院経蔵聖教目録（深密藏第120函13号）」という江戸時代末の聖教目録が現存しており、それと現蔵の状況を示す『石山寺の研究 深密藏聖教篇』所収の目録と照合することにより、現蔵の聖教のどれが当時の密蔵院でどのように所蔵されていたかが判明する。さらに、墨書銘の存在しない経箱所収の聖教についても伝来の院坊を確認していく手がかりになろう。そこで、寺院における聖教の伝来に関する史料として、ここにその目録を抄出ではあるが紹介したい。

（綾村 宏）

于時	天保五年甲午年二月中旬書写終	這教目録者密蔵院于經藏納處之聖教之書也 從融遍僧都申請而為嚴長僧都意得之書寫之者也尤 他山江出事不許之者也	仁記	（中略）	灌頂 御影供 安居終供養	翻梵語 三帖 開本	悉曇字母积義 大師	（中略）	東寺要記	灌頂 御影供 安居終供養	翻梵語 三帖 開本	悉曇字母积義 大師
四度次第	四帖	忍辱山流	（中略）	仁和寺年中行事	（中略）	後七日御修法等	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）	東寺御影供行法次第	（中略）	後七日御修法等	灌頂 御影供 安居終供養
一	一	一	一	一	一	北院御室五十箇条	仁和寺諸院家記	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	高野山大塔供養記	延暦寺供養記	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	元応二年	元応二年	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	國師僧正	國師僧正	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	仁尊寿院僧都成実	仁尊壽	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	良賢	良賢	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	尊賢	尊賢	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	尊觀	尊觀	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）
一	一	一	一	一	一	寄合書	寄合書	一	同	入堂次第	灌頂 御影供 安居終供養	（中略）





